

# 学 校 研 究

## 中 学 校

塩山中学校	-----	55
塩山北中学校	-----	57
松里中学校	-----	59
山梨南中学校	-----	61
山梨北中学校	-----	63
笛川中学校	-----	65
勝沼中学校	-----	67
大和中学校	-----	69

## 「生きて働く国語力の定着を図る指導」

### I 主題設定の理由

「心をたがやす国語力向上」(H16・17年度県教委指定)の拠点校として、昨年度から「国語力の向上」についての研究を推進してきた。

「国語力(言語を中心とした情報を処理・操作する力。考える力や表す力などを支え、その基盤となる力)」は、確かな学力を身につけることはもとより、生徒の自己形成や人間関係形成のための基盤となる重要なものである。「国語力」と聞くと国語科だけに任せておけばよいと考えがちであるが、その基本となる「話す・聞く・書く・読む」という力は一朝一夕に身に付くものではなく、繰り返しや積み重ねが必要であることは言うまでもない。そう考えると、国語科の教育課程の限られた時間だけでは不十分ともいえる。しかしながら、他の教科等で話す場面や書く場面を設定すればその時間を補充することができる。また、日常の学級指導や生徒指導の場でもそれらの活動を仕組むことは可能である。つまり、国語科で「話す力・聞く力」「書く力」「読む力」「言語事項」の基礎基本を習得させ、総合学習を含む他の教科・領域等でその力を活用させていけば、生徒の国語力は伸張していくであろう。

本年度はこのような考えに基づき、昨年度の実践を継続していきながら、時・場所・場合に応じた(=生きて働く)言葉を活用する能力、言い換えれば「伝え合う力」を育てることを学校教育活動全体で推進していこうと考えた。

### II 研究の方針及び方法

#### 1 研究の方針

話す力・聞く力・読む力・書く力・言語事項の習得及び活用を、各教科・総合・道徳・特別活動等の学校教育活動全体で意図的に仕組む。

#### 2 研究組織及び研究の方法

- (1) 「教科部会」「学年(総合・道徳・学級)部会」「家庭・地域連携部会」の3つの部会を組織し、研究を進める。
- (2) 昨年度実践したことをもとに、それぞれの部会で今年度の取り組みを絞り、全体で検討した上で、各部会を中心にして実施していく。研究は部会・教科・学年の時間をより多くとり、全体会はその意思統一の場とする。
- (3) 研究授業については時間を設定しないが、必要に応じて教科ごと、学年ごとに行う(同じ授業案を使った他クラスでの授業)。

#### 3 各部会の取り組み

- (1) 教科部会…各教科での取り組み  
「話す」「聞く」「書く」「読む」取り組みを授業の中に位置づけ、意識的に実践していく。
- (2) 学年部会  
総合的な学習・学級指導(朝の会・帰りの会を含む)において、「話す」「聞く」「書く」場面を設ける。
- (3) 家庭・地域連携部会  
ア 望峰の時間(毎朝8:15~30の15分間読書)の継続  
イ 読書・学習に関わる調査(意識及び実態調査, CRTによる国語力調査)  
ウ 図書カードによる読書の量の調査

- エ 児童センターでの読み聞かせ
- オ 講師による読み聞かせ
- カ 「心に残った一冊の本」を生徒に紹介
- キ 「ことばの掲示板」設置
- ク 学校便りの配布

### Ⅲ 成果と課題

#### 1 成果

##### (1) 学校での取り組みについて

###### ア 国語科として

- ・ねらいを明確にした授業は、生徒にとっては「わかる授業」につながり、学習意欲や学習理解が深まる。
- ・「メモっ太郎」を使うことで、言葉に対する意識が少しずつ向上し、書くことに対する抵抗が少なくなってきた。

###### イ 他教科・領域として

- ・どの教科でも話す場面や書く場面を意識的に設けたことで、生徒たちが話したり書いたりする機会を増やすことができた。

###### ウ 学年として

- ・教職員（特に担任）の日々の指導により、生徒の日常の言葉遣いや「生活ノート」への記入状況が徐々に良くなって（増えて）いる。

###### エ 言語環境について

- ・朝の15分間読書については、生徒が集中してきちんと取り組んでいる。
- ・大切な言葉や美しい言葉を紹介する「ことばの掲示板」に、生徒の詩が寄せられたのは一つの成果である。

##### (2) 家庭・地域との連携について

- ・読み聞かせは、練習の段階から生徒も真剣で、本番では緊張しながらも堂々と、また、楽しそうに行っていた。聞いていた児童も目を輝かせて参加していた。その反応を見て生徒たちは自信を持ったようである。
- ・保護者のアンケートを見ると、親子の話し合いや一緒に活動に取り組む家庭も多く、家庭の中で読書活動も行われている。

##### (3) 全体として

この研究を通して、生徒も教職員も「言葉」や「言葉遣い」に対する意識が強くなったことが大きな成果である。また、国語力を育てるには、毎日の不断の取り組みが必要であるということが改めて確認できた。

#### 2 課題

○国語科としては、他教科との連携という部分（話し合いの仕方を教える・レポートや手紙の書き方を教えるなど）をさらに強化していくことが今後の課題である。また、「メモっ太郎」に書かれた「言葉」を授業でどのように活用していくかもさらに考えていきたい。

○スピーチ等、人前で話す機会を設けているが、人前で話すことが苦手な生徒や消極的な生徒もいるので、繰り返し行うことで慣れさせていくことが必要である。

○授業や読書活動等をとおして、さらなる語彙の習得や心の育成を目指したい。

○学校においては、校内の掲示物や教師の言葉遣い等の言語環境を整備することが、思いやる心や良き言葉の使い手を育てることの第一歩である。同時に、家庭との連携を図りながら、家庭内での言語環境（読書活動や会話など）を整えることも考えていきたい。

## 「自ら学び、進んで活動できる生徒の育成」

～確かな学力を育てる学習活動の実践を通して～

### I 主題設定の理由

#### 1 学習面から

全校生徒137名の小規模校である。真面目な生徒が多いため、学習への取り組む姿勢はよく、朝学習・授業に真剣な態度で臨んでいる。しかし、各学年の人数が少ないので、大規模校の生徒ほど競争心は旺盛ではなく、日々の学習をこなしているだけの生徒も多い。特に自らの学力の状況や学習の到達度について、十分に把握して、それを自分の学習にいかしている生徒は少ない。生徒が学習に対してさらに、強い興味・関心を抱き、意欲的に取り組む授業を実践したり、学習方法、学習形態などに工夫を行い、さらに意欲がわいてくるような学習活動の実践をしていくことが今後の課題ではないかと考える。

#### 2 生徒活動の面から

本校の生徒は基本的に素直であり、物事に真面目に取り組む。反面、自ら進んで意見を発表したり、自らが問題意識を持って活動に意欲的に取り組めるかという点、不十分である。言い換えれば、「指示待ち行動」的な面が見られ、指示されたことに対しては真面目に取り組むが、自ら仕事を見つけて取り組んだり、自ら課題を見つけて解決していくという意識は弱い。その部分が本校の生徒活動に関する課題であり、自ら進んで活動していくような生徒を育成することが必要である。

### II 研究の具体的内容と方法

本年度は研究部会を「学習指導部会」「国語力総合部会」の2部会制とし、部会研究会を中心に研究を進めてきた。また、教科に関わることは教科別研究会、総合など学年に関わることは学年研究会を中心に研究を進めてきた。

#### 1 確かな学力の育成、新しい指導方法（学習形態）等に関する研究

- ・少人数、習熟度別授業の実践（英語科）
- ・チームティーチングの実践（数学科）
- ・個に応じた指導の実践
- ・基礎、基本の重視、基礎学力の向上に関わる研究と実践  
（基礎学力テスト、朝学習の質的な向上、個別指導など）
- ・特別支援教育の実践
- ・基礎から発展までに関わる学力向上に関する研究と実践
- ・来年度から使用される新しい教科書の発展的内容の取り扱いについての研究。それにとりまなう年間指導計画の検証、修正
- ・先進校「学力フロンティアスクール」の研究の検証と導入

- 2 総合的な学習，国語力・読解力向上に関する研究
  - ・国語力，読解力向上に関すること
  - ・本校における国語力の定義
  - ・国語力向上に関する環境づくりの実践（日常指導，掲示物等の見直し）
  - ・読書活動の推進
  - ・総合的な学習の時間の内容の検討と実践，見直し，質的な向上
  - ・総合的な学習の時間における国語力向上との関連と取り組み
  - ・先進校の研究の学習と本校への導入，実践
- 3 今までの継続研究（確認と実践）
  - ・開かれた学校づくり関すること（学校評価などの実践）
  - ・目標に準拠した評価（絶対評価）についての確認と実践

### Ⅲ 具体的な取り組み（成果と課題）

- 1 確かな学力の育成，新しい指導方法（学習形態）等に関する研究について
  - (1) 少人数，習熟度別授業の実践およびティームティーチングの実践
 

今年度も昨年度と同様に英語科において，1年生少人数授業，2，3年生完全習熟度別授業を1年間通して実施した。また，数学科においては，2年生について週1時間のティームティーチングを実施した。特に英語科においては，2年目の実践ということもあり，学力の到達度において顕著な効果が出てきている。

数学科においては，ティームティーチングによる研究授業を実施した。一授業内における習熟度の課題演習の授業を試みてみた。このような実践において，ティームティーチングの有効性を痛感した。さらには，ティームティーチングに適した教材や課題および指導過程を研究していく必要性を感じた。
  - (2) 基礎，基本の重視，基礎学力の向上に関わる研究と実践
 

年2回の基礎学力テストの実施と年間通しての朝学習の実践の継続を行うとともに，その内容や方法にも検討を行い，質的な向上の研究を進めた。本校においては，長く取り組んでいる実践なので，定着してきており，確かな学力を培う基礎となっている。
- 2 総合的な学習，国語力・読解力向上に関する研究について
  - (1) 国語力，読解力向上に関すること
 

国語科においては，国語力を意識した研究授業を実施した。また以前から取り組んでいた朝学習の時間帯に実施している一斉読書をより質の高いものをめざして検討してきた。
  - (2) 総合的な学習の時間の内容の検討と実践。総合的な学習の時間における国語力向上との関連と取り組み
 

本年度は昨年度の研究からの継続事項として，総合的な学習の時間において，国語力の向上を図る取組を模索してみた。また，塩山中や塩山北小などの先進校の研究実践を学んだ。

（研究主任 吉澤 直樹）

## 「生きる力を育成する教育の創造」

～ 豊かな心を育み 基礎学力を定着させる指導と評価の工夫 ～

### I 主題設定の理由

新しい学習指導要領が実施され、それに伴い本校では、評価のあり方に関する学習、評価基準の作成、評価方法の工夫改善を研究・検討し実践してきた。また、総合的な学習においても、福祉領域から更に領域を広めた講座選択制による縦割り学習などの実践も行い、より生徒の希望に即した課題の設定を行うことにより着実に成果を残してきた。

今年度は、昨年度の研究の成果をふまえ、更に深化させるために三つの柱を設定した。

- 1 基礎学力・表現力向上の取り組み
- 2 豊かな心をはぐくむ道德教育の推進
- 3 よりわかりやすく、客観的、信頼性を高める評価の取り組み

学力低下が叫ばれる昨今、生徒の実態を客観的に把握し、基礎学力向上の取り組みを実践する中で、生徒・保護者がわかりやすい評価方法により、生徒一人一人が現状を的確に把握し、明確な目標を持って取り組み、また、道德教育の充実を図り豊かな心を育むことが、生徒一人一人の資質向上につながると考え、本主題を設定した。

### II 研究の内容

#### 1 基礎学力・表現力向上の取り組み

- (1) 前年度と同様に NRT・AAI 検査の結果をもとに、生徒の実態把握と問題点を考察し、教科担当を中心に取組んだ。また、その具体的な実践を公開する研究授業を持ち、研究の深化をはかった。
- (2) 基礎学力を、国語(漢字)・数学(計算)・英語(単語)に絞り、自主学習→三大会テストを繰り返すことで定着を図った。

#### 2 豊かな心をはぐくむ道德教育の推進

本年度、「心に元気をはぐくむ道德教育推進事業」の一環として、地域素材や、地域人材を活用した授業を仕組み、学校だけでなく地域を巻き込んだ道德教育の推進に取り組んだ。

### 3 よりわかりやすく、客観的、信頼性を高める評価の取り組み

- (1) 評価の仕方を毎年見直しする中で、保護者・生徒にとって理解しやすい評価の方法を研究した。
- (2) 個人評価の充実のために、総合的な学習の評価において、1枚ポートフォリオにループリック評価・コンセプトマップを組み合わせた評価の方法を実践し研究した。

## III 研究の成果と課題

### 1 基礎学力・表現力向上の取り組み

- (1) NRT・AAIを用いて実態を調査し、CRTで検証することによって松里中の生徒の実態が客観的に分析でき、相互理解する中で、具体的な課題が見えてきた。継続してデータを蓄積することにより、生徒の変容が今後明確になると思われる。しかし、校内研究で必要とする資料が充分得られるものであるかは研究の余地があり、検査方法についても更なる研究が必要であると考えられる。
- (2) 自主学習の取り組みは、今までの学習を見直す機会になっている。しかし、不合格者(1教科80点未満)の生徒が固定化してきており、その生徒への対応が今後の課題である。また、行事や定期テストなどの関係で、取り組みが充分確保されないままテストを実施せざるおえないこともあり、検討することが必要であると考えられる。

### 2 豊かな心をはぐくむ道德教育の推進

地域の人材や題材を活用した授業を公開することにより、道徳的实践力が生徒一人一人の心に徐々に定着し、それが生活の中にも生かされつつある。また、道徳授業は、学校だけでなく保護者、地域にも公開することにより、学校教育への理解と支援につながっていると考えられる。

### 3 よりわかりやすく、客観的・信頼性を高める評価の取り組み

- (1) 授業初めのオリエンテーションを効果的に、親にもわかりやすくするために、現在ある教育計画を基にシラバス検討・作成した。今後実践の中で研究していく上で叩き台になると考えられる。
- (2) コンセプトマップ・ループリックを組み合わせた1枚ポートフォリオによる評価方法は、「総合的な学習」だけのために活用する評価としては、内容が煩雑になり、生徒や指導する側がその活用方法が充分につかみきれないうちに学習が終わってしまった。今後、本年度の反省を生かし、学習を充実する手だてとなる評価法を考えていくことが重要である。(文貴 研究主任 小林 誠 治)

『真理を求め、自ら考え、正しく判断し、進んで学習する生徒の育成』

～探求心をはぐくむ学習活動の推進～

I 主題設定の理由

価値観が多様化し、情報も氾濫する現在、学校として、学校だからこそできる「学び」や、教科の授業の中だからこそできる「学び」を考えていくことの中に、新たな研究の方向を見いだす必要があると考えた。関心をもてたり、興味をひかれるものを見付けたりすることができれば、ともに学ぶ仲間と互いの考えをかかわらせながら、考えを練り合い、磨き合い、高め合うことができる。各教科において基礎・基本の定着を図り、それらをもとに思考したり、判断したり、表現しながら課題解決的な学習を行い、探求心をはぐくむことが大切であると考えた。

こうした探求心をはぐくむ学習活動を推進することにより、真理を求め、自ら考え、正しく判断し、進んで学習する生徒が育成される。こうした生徒の育成を図るには、昨年度本校の課題として取り上げた「思考力・判断力・表現力・問題解決的な資質や能力の育成」を図る授業づくりを継続研究とし、昨年度まで継続的に取り組んできた「指導と評価の一体化」においては「フィードバックを充実させることによる基礎・基本の定着」を図る授業づくりについて研究することとした。

II 研究の内容

1 研究の具体的内容と方法

- (1) 統計資料からの課題をもとにした授業改善
  - ・各教科で指摘されている指導に関する工夫・改善の推進
  - ・課題とされる思考力・判断力・表現力をはぐくむ課題解決的な授業の推進
  - ・C R T（目標基準準拠検査）による検証
- (2) 評価内容及び評価方法の改善
  - ・各教科における評価内容の改善
  - ・評価方法の改善
- (3) 校内研究会及び地区研究会での研究授業の実施
  - ・校内研究会の実施（国語・理科・技術・体育・英語）
  - ・部会研究会での研究授業の実施（理科・社会・音楽・体育・英語）
  - ・ブロック交流研究会での研究授業の実施（英語）
  - ・実施した研究授業をもとにした指導上の課題の検討

2 研究内容

- (1) 思考力・判断力・表現力・問題解決的な資質や能力の育成
  - ① 思考・判断・表現などが必要になる課題解決的な学習の推進



- ・学習形態の工夫も含め、考える時間を確保し、学んだことや経験から判断し、表現することを通して、課題を解決する。
  - ② 自分自身の生活との関係で考えたり、表現したりする授業の工夫
    - ・自分とのかかわりで学習対象に接し、自分の考えや感情を表現することによって関心や意欲を高め、態度の育成を図る授業の工夫
  - ③ 発表や話し合いなどにより、学びの質を高める指導の工夫
    - ・自分の考えと他者の考えを比較検討するなかで、確かな学びとなるような指導の工夫
- (2) 指導と評価の一体化を図り、フィードバックを充実させることによる基礎・基本の定着
- ① 生徒の発言やつまずきの分析をもとにした適切な支援
    - ・生徒の発言・発想のもとになっている知識を生かすような支援
    - ・生徒の学習上のつまずきの分析と指導の工夫
  - ② 評価内容及び評価方法の改善
    - ・定期テスト、単元末テストなどの出題についての検討
    - ・実技テスト、パフォーマンス・テストなどの実技テストについての検討
    - ・評価にかかわる問題点の検討

### Ⅲ 成果と課題

研究授業および研究会での検討を通して、発問や支援の在り方を意識した授業づくりすることにより、学びの主体である生徒がどのような目的意識で学習活動に取り組んでいるかを教師が深く考えるようになってきている。思考・判断・表現の活動を多くとり、課題解決的な学習を推進することにより、生徒が意欲的に学習活動に取り組んでいるといえる。CRT（目標基準準拠検査）の結果（国・数・英、2月実施、1・2年生対象）からも各教科における基本的な内容の知識や理解は身に付いてきていることが検証できた。

課題としては、ペアやグループなど学習形態を工夫し、生徒同士が教え合い、学び合う授業づくりや、学びの深まりが感じられる授業づくりができていない点である。思考力・判断力・表現力・問題解決的な資質や能力の育成を図るため、導入や学習形態を工夫するなど、指導内容や指導方法の工夫・改善を図る必要がある。導入を工夫して、生活との関連や既習事項との関連を意識した授業を推進することにより、興味や関心を高め、さらに意欲的な学習へとつながるようにしていきたい。

指導と評価の一体化を図り、基礎・基本の定着することについては、技能や知識の習熟において、計画的に繰り返し指導することで基本的な学習内容の定着を図ることも必要だが、基本的な技能や知識の定着のための工夫や個に応じた適切な指導も重要である。生徒の実態に合った適切な指導を心がけ、基礎・基本の定着を図りたい。また、学習に入る際のガイダンスを充実させることにより、学習内容や学習目標を明確にすることで意欲的な学習へと結びつけ、相互評価や自己評価、またポートフォリオを活用し学習を振り返ることで自己学習力の育成を図り、学習活動が充実したものになるようにしていきたい。

（研究主任 辻 純二）

## 確かな学力の向上を目指す学習指導に関する研究 ～学ぼうとする力を高めるための指導を通して～

### I 主題設定の理由

学ぼうとする力は、どの教科にとっても大切な力・育みたい力であり、全校を上げて、すべての教科や様々な場面を通して育みたいと願うものである。しかし、全国的に学ぼうとする力が低いことが言われている。本校の生徒の実状を見ても、3年間の学力フロンティアスクール指定研究の反省・課題・今年度の研究内容への意見を見ても、同様に課題を持っていることが明らかにされてきている。

そこで、今年度もこの部分に研究領域を定め、昨年度は、どのような指導の工夫や改善、どのような新たな指導を実践するならば、生徒の学ぼうとする力が高まるのか実践研究してきたが、今年度は、昨年度までの教科の実践研究を継続・見直しをしながら、それらの研究の一番の基礎となる「学級経営の充実」に焦点を当て、基本的な生活習慣と学習習慣の確立をめざし、原点に立ち返り、研究を進めていきたい。

本校で定義した確かな学力は、それぞれを切り離れた別々なものとしてとらえることはできない力であり、互いに関連しあっているものと考えている。学ぶ力は、学んだ力と関わりがあるであろうし、学ぼうとする力は学ぶ力や学んだ力と大きく関わっているはずである。したがって、学ぶ力と学んだ力も含めながら、総合的に、学ぼうとする力を高めていくことが必要と考えたのである。

以上の理由により、今年度の研究主題を設定した。

### II 研究の内容

#### 1 研究の具体的な取り組み

##### (1) 一人一人の個性を大切にする学級経営

一人一人の個性を大切にし、お互いに高めあえるような学級とはどのような学級か、そのような学級を経営するには、どんな方法があるのかを、講義なども含めながら検討し、実践していく。

##### (2) 基本的な生活習慣と学習習慣の確立

望ましい生活習慣と学習習慣（学校生活の過ごし方、

チャイム着席，あいさつ，発言の方法，ノートのとおり方，話の聞き方など）について，山梨北中の方針を教師全員で確立（確認）し，どのような方法で，どのように身につけさせていくのか，検討・実践する。

(3) 個に応じた教科指導

個に応じた教科指導の視点は，次に示す4つである。これらは，昨年の各教科の研究結果に基づいており，今年度も継続・見直しをする必要がある事項と考える。

ア 評価を生かした指導の改善

イ 少人数指導・コース別学習など学習形態の工夫

ウ 個に応じた指導のための教材開発や，学習過程の支援の工夫・改善

エ 学びの機会の充実

- ・山北タイムの充実
- ・学びの集会の継続
- ・朝学習の充実
- ・夏休みサポートタイム，めざせ学習 120 時間運動
- ・自分自身を振り返るために→自分自身の振り返りノート（自律ノートなど）の使用
- ・家庭学習の充実

### Ⅲ 成果と課題

#### 1 成果

今年度は，「学級経営」を研究の具体的な取り組みとしたため，学年会議でも必ず話題となり，学年内同一歩調で指導することができた。また，「北中生の授業の受け方」も全職員で確認することもでき，学級での指導に有効であった。また，生徒へのアンケートでも，「授業を集中して受けている」と答えた生徒が，昨年度より増えた。

個に応じた指導は，教科部会を中心に，教科の特性に合わせた指導ができた。

#### 2 課題

1・2年生は，家庭学習に半分ほどの生徒しか取り組んでいない。「家庭学習の充実」が，来年度への課題として残された。

## 豊かな心をもち、自己実現をめざす生徒の育成

### I 主題設定の理由

近年の社会状況を眺めると、情報化、少子高齢化、国際化が急速に進み、人々の価値観も多様になってきている。そうした中で生きる目標や意義が見いだせない者は、目に見える数字や物質的・金銭的価値ばかりを追う生活を続けたり、刹那的な生き方に陥ったりする危険性がある。そうした影響は、若い世代に強く表れており、自分の欲求を満たすために他を顧みない言動をとったり、何事にも無気力で、現実から逃避がちな生活を送ったりする青少年も少なからず存在する。現在本校においては、さほど心配される状況は見られないが、何人かの生徒にそうした要素が内在していることは否定できない。

こうした状況に対し、学校が果たす役目は、広い視野で社会や自らの将来を見すえ、心の充実をはかりながら学習活動を進めていく生徒の育成である。そのためには、物事に感動できる心、他を思いやり共に生きようとする心を培い、学ぶことの喜びを味わいながら問題を解決することによって、たしかな学力を身につけようとする意欲や態度を育成することが必要である。学校における教育活動のあらゆる場面で、家庭や地域と連携しながら、生徒に対するそうした支援を続けていくことが、これからの社会を生き抜く生徒を育てる一助となると考え、この主題を設定した。

### II 研究の具体的内容

#### 1 教育課程全体

- (1) 生徒の実態・意識調査をもとにして、研究主題に沿った目指すべきより具体的な生徒像・学級の在り方について研究し、共通理解をもつ。
- (2) 地域に根ざしたカリキュラムの研究を行う。学校5日制の課題を把握し、よりよい教育活動が実践できる方法をさぐる。
- (3) 学校・家庭・地域が連携した道徳の授業、道徳的実践活動を推進する。

#### 2 教科指導

- (1) 基礎・基本の確実な定着をはかる教科指導法および評価方法の研究を行う。
- (2) 家庭学習や朝学習のあり方の研究を行う。
- (3) 選択教科の実践と検討を行う。
- (4) T・Tの有効な指導法の研究を中心に、個に応じたきめ細かな教科指導方を研究する。

#### 3 総合的な学習

- (1) 学年部会を中心に、「総合的な学習」の実践・検証および目指すべき学級に対しての具体的な学級づくりの方策を探る。
- (2) 情報活用能力の育成のための研究を行う。(教科指導でも研究する)

(3) 「総合的な学習の時間」の実践と検証を進める。次年度カリキュラムづくりの研究を行う。

#### 4 特別活動

(1) 学校5日制下での生徒の主体性や創造性を引き出す特別活動のあり方について研究を行う。

#### 5 生徒指導

(2) 教育相談部を中心とした、学校・学年体制での不登校生徒への対応のしかたを研究する。また、全体での課題提起と共通理解を進める。

(3) 生徒指導の三つの機能（「自己存在感」を与える。「共感的人間関係」を育成する。「自己決定の場」を与える。）を生かした教科指導や学級づくりの実践を行う。

### Ⅲ 成果と課題

今年度本校は、「心に元気を育む道德教育推進事業」の指定を受け、道德教育の充実を重点において教育活動を展開してきた。道德授業の充実、授業以外での道德的实践活動を積み重ねることで、学級や学年、学校づくりの上で道德教育の重要性をあらためて感じた。11月に行った地域・家庭へ向けた授業公開と道德教育講演会では、多くの来校者から感動や賛同の言葉をいただいた。今後も、思いやりの心、生命尊重の心、自尊感情の育成など、豊かでたくましい心を育てるための取り組みを続けていきたいと考える。

教科指導では、各教科ごとに授業研究を中心とした研究を進めることにより、それぞれの特性を生かした指導法を研究することができた。また、生徒個々に対しても授業以外に個別指導を行うなど、きめ細かい取り組みができた。

総合的な学習の時間について、今年度は、過去の実践内容を検証し、3年間を見通した学習体系作りに取り組んだ。学年間の情報交換を密にし、どの時期にどんな内容に取り組めば、生徒にとって最も効率的なのかを探ることにより、進路学習を柱とした大まかな流れが確立できた。今後もさらに研鑽を重ね、「生きる力」に結びつく総合的な学習の時間の時間のもちかたを追求していきたい。

特別活動については、交流活動などを企画し、体験を通して豊かな心を育むことをテーマとして取り組みを行ってきた。生徒会活動を中心に組織的な活動を仕組むことで、周りの状況を見て、判断し、進んで行動しようとする姿が見えるようになってきた。今後は、学校全体の課題と学年や学級の課題を同じ土俵の上で議論し、効果的なてだてを高じていく必要がある。また、教育課程全体の中での特別活動の位置づけと活動時間の確保も大きな課題になると考える。

生徒指導については、職員全体で共通意識をもちながら、家庭や地域との連携を密にすることで生徒の状況を適切に把握することができた。家庭の価値観が多様化するにつれ、学校教育活動への理解とはかることがますます重要となる。

市町村合併に伴い、来年度から本校も2学期制を導入する。生徒にとって学校生活が有意義なものとなることを主眼とし、今年度の成果の上に望ましいカリキュラムづくりについての研究の重ねていきたい。

(研究主任 齊藤昌志)

## 基礎学力をはぐくむ教育活動に関する研究 ～個に応じた指導を通して～

### I 主題設定の理由

#### 1 今日課題から

今日、国際化・情報化・科学技術の発展・環境問題等への関心が高まり、ただ知識を身につけるだけではない、新しい時代の教育のあり方が問われている。このようなとき新しい学習指導要領が改訂された。この改訂は、「生きる力」（基礎・基本を確実に身に付け、それを基に、自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や、豊かな人間性、健康と体力など）の育成をねらいとしている。これからの社会はさらに多様化することが考えられ、ますます今の生徒にこの「生きる力」を、またこの「生きる力」を支える「確かな学力」を身につけさせることが課題となっている。

#### 2 生徒の実態から

本校の生徒は明るく素直である。また、生徒会活動や部活動にも熱心に参加している。学習面でも、授業にまじめに取り組む生徒が多い。しかし最近の傾向でも言われるように、教師の指示がなければ行動できない生徒も少なくない。このような中では、生徒一人一人に対してきめ細かな指導方法を工夫して、まず基礎学力の定着を図り、さらに確かな学力へと高めることが必要であると考え。

以上のように、「確かな学力」を身につけさせるために生徒の実態にそくしたわかりやすい授業（基礎・基本の重視）の研究と実践をもとに生徒一人ひとりに基礎学力を身につけさせたいと考え、本主題を設定した。

### II 研究の内容

#### 1 本校がとらえる基礎学力について

学力、あるいは基礎学力の定義については様々な論議がされているが、本校では、確かな学力の基盤となり、基礎・基本を支える力が、「基礎学力」であると考え。この基礎学力は、①基礎的な力（読み・書き・計算に代表される、すべての学習を成立させる上で必須の力）と②知識・技能（教科独自の基礎的な知識・技能も含んだもの）とからなる。この「基礎学力」を高めるために本校では、

- (1) 各教科の基礎的な力を身につけさせる。
- (2) 学習への意欲・関心を高める。
- (3) 意欲的な学習ができるような学習環境を整える。

この3点を重点的に実践し、この研究を深めようとする。

#### 2 研究の具体的内容と方法

- (1) 基礎・基本を身につけるための個に応じたきめ細かな指導方法・指導形態の工夫をする。

○ 「基礎学力」を身につけさせるために各教科の学習内容について、個に

応じたきめ細かな指導の方法を工夫する。

- 学習相談日の活用方法の研究と実践をする。
  - 朝学習の時間に読書活動(朝読書)を設定し、読む力を身につけさせる。
- (2) 学習に対する興味関心を高める工夫をする。
- 生徒の関心・意欲を高める工夫を授業を通して取り組む。
  - 学習の意欲をためることができる学習環境を整える。
- (3) 絶対評価の評価方法の改善をする。
- 生徒の学習意欲を高めるための評価方法を研究・実践する。
- (4) 授業実践を実施する。
- 個に応じた指導に関して、授業実践を行った。

6月24日	理科(井田)	「電流とその利用」
10月19日	道徳(深澤)	「小さな幸せ」
11月16日	国語(浅川)	「竹取物語」

### Ⅲ 成果と課題

#### 1 研究の成果

昨年度各教科で確認をした「基礎学力」をもとに、生徒に身につけさせたい学力の研究を進めることができた。またすべての教科に必要な「関心・意欲」「学習環境の整備」を整えることができた。そこで各教科で焦点化した「基礎的な力」「各教科で学習を成立させる上での必須の力」を身につけさせることを目標に、授業規律・授業に向かう意欲・家庭学習の習慣化などを含む学習環境の整備と関心・意欲(生徒に授業に対する興味を持たせること及び学習の目的を理解させ関心を持たせること)を高めるための工夫を実践していくこととなった。

- 一昨年度より少人数の授業を取り入れ、教師も生徒の反応をよりいっそうつかみやすくなり一人ひとりに指導ができる時間も増えた。また生徒にとっても授業の中で質問や発言がしやすくなった、問題を解く量が増えたという感想であった。
- 教師側も具体的な取り組みとして、授業規律の確立を目標に意識を高めて、指導にあたった。生徒が今から授業を受ける意識・意欲を高めるため何が必要かを話し合い、全教師共通理解のもと授業力の向上に努めた。
- 授業研究をもとに個に応じた指導を見直し、各教科での教材研究や授業展開の参考にしていった。ワークシートを何段階か用意したり、発問や生徒からの発言・質問等の取り扱いにも工夫をするよう心掛けることができた。

#### 2 今後の課題

- 勝沼中学校としてさらに基礎学力をどうとらえて、効率よく着実に定着させる事ができるか、及びそれらについてより一層職員間の共通理解を行うこと。
- 少人数指導を取り入れて3年目になるが、さらにそれを習熟度別学習にひろげてゆくのがよいのか、またその場合の教育課程・教材・評価等の工夫をどのようにしたらよいのか。また、保護者・地域にどのように理解を得ていくのか。
- 相対評価から絶対評価へと評価の方法が変わり、その評価方法のさらなる見直しと評価して終わりではなくその評価をどのように生かして生徒の学習指導に当たればさらに効果を上げることができるのか。(評価と指導の一体化)
- 上記の課題に取り組むために、教育課程の見直しの検討をおこなう。完全学校週五日制導入時に、同様の見直しをおこない、行事精選等により授業時間数を確保したのだが、さらに教育課程を工夫することによってより多くの授業時間を確保することで学力向上に結びつけることができるのではないか。また、総合的な学習の時間などで、教科で身につけた基礎学力をさらにひろげ、また、逆に総合的な学習の時間での課題をどのようにすれば教科の学習に生かせることができるかなど、効果的にリンクさせる方法を考えることができないうか。  
(研究主任 矢澤 恵美子)

## 確かな学力を身につけた、 心豊かで思いやりのある生徒の育成

### I 主題設定の理由

現代社会においては、国際化、情報化、少子高齢化が急速に進み、社会が急激に変化しつつある。このような変革期を生きていく生徒には、変化に対応し、主体的に行動できる自己の確立が強く求められる。そのために本校においては「確かな学力」と「豊かな心（自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や、物事に感動する心など豊かな人間性）」をベースに「自ら学び、自ら考え、主体的に判断して、よりよく問題を解決する力」の育成を目指して本主題を設定した。

### II 研究の具体的内容と方法

#### 1 教科学習において、基礎、基本の定着を図るための研究

##### (1) 国語力の向上

- ア 実態調査と分析
- イ 読書活動の推進
- ウ 大和タイム（火曜日6校時帯）の活用
- エ 各教科領域での取り組み

##### (2) 個に応じた指導

- ア 生徒個々のつまずきの把握
- イ 学習方法、家庭学習の指導

#### 2 豊かな心の育成を図るための研究

- (1) 学級集団づくり
- (2) SCなどの活用方法
- (3) 学校行事、道徳等を通して豊かな心の育成

### III 成課と課題

#### 1 基礎基本の定着

##### (1) 国語力向上

##### ア 読書指導について

- ・朝読書の時間が継続的に実施できていることがまず第一の成果といえる。
- ・年間を通して朝読書を続けたことにより、本との距離を縮めることができた。また、読書習慣の定着や、始業前に落ち着いた時間を過ごせたなどの効果がみられた。
- ・今後は朝読書のねらいをよりはっきりさせ、読書の質を高める工夫をしていく必要がある。

##### イ 各教科領域での取り組みについて



- ・各教科で授業公開したことは大変有意義であった。各教科担当が国語力の向上という観点で生徒を見たことで、本校生徒の国語力の問題点が全職員に共通のものとなった。
- ・国語科だけでなく、各教科でどの部分が弱いか、力をつけたいかを考えた取り組みができた点はよかった。
- ・今後は教科特有の工夫、全教科に共通する工夫を洗い出し積み上げていくことが大切になる。

## (2) 個に応じた指導

### ア 各学年での取り組みについて

- ・大和タイムでの取り組みを中心に補習の機会もつくるようにした。その中ではきちんと取り組む様子を見られた。しかし、学校で確保できる時間は限られている。家庭学習につなげていかないと定着しない。
- ・今後は一人ひとりの学習状況を検討し、それに即した一人ひとりの目標を設定し、取り組みのための経過を把握し、成果の有無を考察していくことが大切。そのための個人記録表なども必要であろう。

### イ 各教科領域での取り組みについて

- ・少人数の利点をいかして各教科できめ細かな指導がなされていた。各教科の授業をみることで具体的な取り組みが実感できた。
- ・各教科それぞれに工夫し努力していると思う。しかしこれについても成果の状況を検討していくことが必要。具体的には、定期試験や到達度テストの結果から、一人ひとりの不足している点を把握し、それに対する取り組みを考え、実施して、成果の有無を見ていく。厳しいけれどできるだけ具体的な形で取り組みの成果を検討していくことが今後の課題となろう。

## 2 豊かな心の育成

### (1) 道徳教育について

- ・「お互いを認め合おう」というテーマで道徳の研究授業ができたことは大きな成果であった。道徳部会で何回も話し合い、授業をつくり上げていけたこともよかったと思う。

### (2) その他

- ・各学年の学級集団作りについての交流ができたこと、SCを交えて生徒の心の問題について話し合えたことは大変有意義であった。

(研究主任 桐原誠之)